

令和6年度第2回自然に健康になれる環境づくりの推進に関する検討会議事録

1 日 時 令和6年7月31日（水） 午後2時から4時まで

2 場 所 千葉県庁南庁舎9階会議室

3 出席者等 委員5名、事務局8名 計13名

4 議 題

協議事項

①令和6年度自然に健康になれる環境づくりの推進に関する事業計画の具体的取組について

②既存事業のブラッシュアップについて

5 結果概要（委員からの意見）

①自然に健康になれる環境づくりの推進に関する実施計画の具体的取組について

（取組具体事例の紹介）

・事例の中のコラムの位置付けについて、一向にいいことを一生懸命書いても、結局理解できないので、何とかハードルを下げる、やってみたいと思わせるようなものがよい。1階でもいいからあがりましょうならまだしも、スリーアップ・フォーダウンというのは、もうそれはハードルが上がってしまっている。できる限りハードルをさげるようなコラムがよい。

・市町村向けではあるが、色々な人が見ることができるものとしている。コラムは少しブレイクダウンした内容でもいいのではないか。またコラムには、ぜひルビをふるとよいのではないか。漢字が苦手な人にも届くようなものになるとよい。

・取組事例を見る限り、小さな町レベルではどれも難しいかもしれないという印象。大きな市では、専門の方々がたくさんいるのでできるかもしれない。

・事例があったあとに、コラムで説明がある。事例が少し難しそうだなと思っても、コラムをみて、そうかこういう風に考えれば、うちでもできるかなとなればよいのではないか。

・取組事例の身体活動・運動のところで、ウォーカブルなまちづくりの指標を千葉県で策定しているところ。そういう意味では、ウォーカブルを取り組んでいる事例も紹介するとイメージが付きやすいのではないか。

・事例の目次のなかで、取り組みやすい順に並べ替えて、例えば運動とかはすぐやってみようという意味で、階段利用の事例を上にして、次にイオンの事例にするとかがよいのではないか。

・食の取組となるとなかなか難しいが、県庁でやる予定の、階段利用を参考にすることはできるのではないか。

・イオンモールは、施設の規模が大きいので、その空間を使って館内を歩くというプログラムができる。モールまでいかななくても、スーパーなどたくさんいろいろなものがあるが、実際にはそういう小規模になればなるほどそういったことをできるスペースに限界があって、なかなか運動には難しい。だが、商業施設でというよりも、何か民間が持っているそう

いったちよとしたスペースを活用して、運動づくりの仕掛けをしてくださいというようなメッセージとなれば、それをヒントに、商業施設以外でも民間の施設などでも考えられるのではないか。

・ぱっと見ると内容が目に入っていない。すごい真面目という感じ。目につくように作ったほうがいい。この取組事例以外でも、啓発物においては字が多い。字が多いと読みたくなる。世の中には、読むのが苦手な人もいっぱいいる。そういう人たちに対して訴求するという意味では、やはり見せ方というのはとても重要。むしろそういう人たちにアプローチすべき。

・栄養と歯と口腔の内容は並べた方がいいのではないか。旭市の事例は、比較的抽象的な内容が多いので一番後ろにするなど。坂口先生の栄養のコラムは栄養の事例のあとに入れるなどはどうか。

・担当者からのメッセージというのは重要であるが、一番最後にここで伝えたいことなどがあるといいのではないか。うちの市町村だったら、そういう視点ならできるかもということを知らせる。取組の項目だてのようなものがあるとよいのではないか。

・階段利用のチラシについて、それを市町村が使えるように、自由にダウンロードして、加工ができるということであれば、それを参考に使える。県でこういうものを作ったという案内をだすとよい。

(部局横断的な連携)

・みんながやっているのであればこうしようとか。事実を伝えるのではなくて、いかに人の心を動かすには、どういう視点がいいかということが検討されている(=行動経済学)。横浜市が行動デザインチームを作って、行政のありとあらゆる分野で、市民や県民の行動を変えるためのメッセージの出し方をいろいろ工夫しているところ。勉強会とかで学んではどうか。

・階段利用の取組。ずっとポスターが掲示されているというのもいいが、例えば、期間を決めて、この期間はみんなで頑張るという取組をしてもよいのではないか。エレベーターの利用状況がもしわかれば、ある1ヶ月間、みんなで頑張ると、脱炭素の効果があつたとか、健康にも、環境にも効果があつたとかがわかるとよい。

・階段は、多分夏じゃないほうがいい。秋ぐらいから。皆で頑張ったおかげで県の予算がいくら減りました。CO2が何グラム減りました。あと皆さんのエネルギーも何キロカロリーと減りましたよというのは目を引く。県庁内の人には数字でいわれることがいいのではないか。

(活用できるデータベースの作成)

・問5 1オと問1 4のクロス集計も追加できるとよいのではないか。

・国民健康・栄養調査は、今年度は拡大調査の年でもある。質問紙のように自己申告ではなく、食事記録により実際に食べている野菜摂取量を調査している。自己申告は食事記録に比べ過少・過大評価の影響が懸念される。実際の摂取量との関連をみていくことが良いと思うので今後検討してもらいたい。

(その他)

・大学という「場」を活用することはよいのではないか（学園祭などを含む）。40歳、50歳になって、しみついた生活習慣を変えるよりはいい。先ほどの、階段利用を促す取組や、運動できる環境という意味では、キャンパス内は良い。自然に体を動かすという考えがあるが、この大学生達が、30歳、40歳になって、10年後、20年後に効果や成果が出ればよい。今までは高校生ぐらいまでのことをいつも考えていたが、大学というのは、割と広い敷地を持っているし、学食も入っているので、運動の面でも栄養の面でもアプローチしてはどうかと思う。

・県民大会では、県庁他部局のチラシなどを設置するブースを設けるということであるが、他の部局でやっているようなイベントにも出向いていったらどうか。「エコメッセちば」という千葉県主催で開催している環境に関する大規模イベントがある。千葉県では、環境に関する部局が担当しており、昨年度の出展状況では県庁内の多くの課が出展している。他の課でも、色々なイベントを持っていると思うので、チェックをして、ぜひ相互に活用してもらいたい。県民大会でも県庁内の色々な課の方に声がけしているので、お互いに乗り入れられるものはやってほしい。

②既存事業のブラッシュアップについて（健康ちば協力店推進事業）

資料をもとに、既存事業である「健康ちば協力店推進事業」について事務局から説明。下記のとおり委員から御意見があった。

・今の塩分3.0グラムという基準は、栄養士がいない、いわゆる一般の飲食店などでは非常にハードルが高い。何かもう少しハードルを下げた形で何かできないのか。例えば、味つけを薄味の要望に対応できますとか。利用者がそういう要望をすることができますというように店主側がメニュー表に表示するだけでもかなり違うのではないか。味噌汁や漬物はつけなくていいということも可能ですとか。そういうことを試験的にでも、やってみるのもよいのではないか。

お店の方に薄味にしてくださいとか、出さなくていいですというのは、何か失礼なのかなと思しやすい。そういうものもウェルカムですというような意思表示をしてくださるだけでも県民の方が言いやすい環境にできるのではないか。そういったものをオプションがあるとよいのではないか。

・とあるハンバーガーショップでは、必ずポテトの塩を抜いてもらっている。少し時間はかかるが、対応してくれる。そういうのを店側は公言していない。

・まずは協力店を増やすことからやるというやり方もあるのではないか。もう1項目くらいできそうな条件を増やしておく、それでやれる店舗もでてくるのではないか。どういう増やし方がよいかということもある。まずは協力店として認める、というようなやり方もあるのではないか。

・オプションで量や食塩とか調整できるというような項目が要件の4番目にあって、それも選んで2つだったらば、そういうところで手挙げてくれるところも増えるのではないか。現在のこの3項目のハードルが高いのではないか。全面禁煙はやっているだろうが、野菜や食塩かどちらかでださないといけないとなると、ハードルが高いのではないか。

・一般の飲食店でやるという実現可能性を考えると、やはり3.0は相当難しい。少し基準をさげてもいいのではないか、

・協力店のマークはシール。今オリンピックもやっているので、金銀銅のように、星が3つつく和金とかはどうか。すごくハードルをさげるというよりは、許容できる範囲で見直していただくというのがいいのではないか。皆さんにも意識をもってもらって、色をつけるのだとすると、去年は銀でしたが、今年は金になりましたかという聞き方ができると思う。そうになると、3年、4年たつと認識が薄くなるという話があったが、毎年、金か銀かを聞かれたら、今年はどうかという話にもなると思う。問いかけというのはとても大事。

・職場で注文するような弁当にも、健康的なものであるとよい。ぜひ働きかけていくとよいのではないか。

③既存事業のブラッシュアップについて（受動喫煙対策促進事業）

資料をもとに、既存事業である「受動喫煙対策推進促進事業」について事務局から説明。下記のとおり委員から御意見があった。

・未成年の喫煙防止策となっているが、未成年だと17歳以下になってしまう。18歳が成人になったので、未成年という表現ではなく、20歳未満に変えたほうがよい。

・受動喫煙の通報について、声を聞く窓口のような、千葉市のようなアプリまではいかなくても、何かそういう窓口が千葉県でもあるとよい。また、啓発物とかにQRコードとか、皆さんが見やすい位置に周知してはどうか。

・アルコールのように、たばこのにおいチェッカーなどのようなものがあると、利用者も助かるのではないか。

・教育の部分では保健体育の授業となる。こういうタイプの授業は、はしおられることが多い。基幹科目ではない。「がん」になる一つの原因として、DNAが傷つくということを理科のなかに取り入れてもらう。その中で、たばこについて触れてもらおうと、それは理科なので、子供の聞く態度もちがうのではないか。

DNAはすごく大事なものだっていう授業だと思うので、それを傷つけるようなものが実はあるのだよというのは、違う視点で話してもらえるのではないか。

・教科からのアプローチではなく、総合的な学習の時間というような、新しい学習指導要領で総合的に取り組むものはどうか。教科で特別講師外部講師を呼ぶということではなく、年間の何時間はこれをやりなさいと、学習指導要領できっちりと決められている。学校の教育現場の教科だけで扱おうとすると難しいのではないか。

・啓発は駅でなくてもいいのではないか。木更津のイオンモールはどうか。君津や木更津は製鉄所もある。しかし企業に勤めていなくても、下請けの人も多い。君津の製鉄所で働いているけれど、新日鉄の社員ではないなどという人は結構いる。そういう人は近隣に住んでいることが多く、移動が車なので、駅というよりは、休日などにイオンモールなどにはいくのかもしれない。野田の方はあまり詳しくないのだが、あの辺りにもそういう施設があるのであれば、考えてもいいのではないか。

・啓発用に作成したうちわについて、このうちわの印刷の中のグラフ図で、21本～30本のところが数字では、5.10と記載があるが、グラフは5の位置に届いていないので記載誤りがある。こういうのは、目ざとい人はしっかりみている。あまりおかしいことを書いていると信用してもらえないことになる。グラフが間違っているのか、数字が間違っているのか確認した方がいい。こういうのは今後の信用に関わる部分でとても重要なことである。

・やはり受動喫煙対策というのは、たばこだけからアプローチするのではなくて、何かと組み合わせることで効果があるのではないか。

・何万人がたばこ吸うのをやめたとというような言い方がインパクトはある。10%の人がと言われて、そもそも10%がどれくらいかをイメージするのが難しい。千葉県で何万人が、たばこをやめましただとピンと来る。例えば、10万人とか100万人とか200万人とか言われると、やっぱり皆すごいと思う。逆に言うと、20万人の中に自分が入っていないと感じさせるやり方もある。

・運動しないのは、たばこを吸うのと同じくらい平均寿命に影響があると言われている。運動しない人のほうが、たばこを吸っている人よりも悪影響ともいわれている。タバコをやめましょう、やめましょうというだけではなくて、やめた後にどうするかということが大事。たばこをやめてさらに健康になるために運動しましょうとか。悪いからやめましょうというだけではなくて、色々なアプローチが必要。

・母子手帳もらう時に、そこにいるお父さんに働きかけるためにチラシを配るとか。男の人向けのもので、パパのたばこをやめさせるということもよいのではないか。